

[新刊紹介]

『カエルの学校—両生類大好きなあなたへ—』

大河内 勇 文・写真 東京図書出版 2025

前藤 薫

「カエルの学校」といえばカエルたちの小学校での騒動を描いた森荘巳池の童話が知られるが、本書はカエルやサンショウウオに魅せられた著者が、それらを研究する仲間から学んだあれこれを綴ったエッセイである。1970年代から現在まで時代を前後しながら、50種を超える両生類が登場して、それらに関わる人々について濃密な記憶が語られる。だが、それは古きよき時代の感傷譚ではない。カエル好きの少年が両生類にのめり込み、大学院の途中で不本意ながら別の道（森林害虫管理学）に進みながらも、カエル仲間との交流を深めてゆく物語である。半世紀にわたる爬虫両生類学の歩みはもちろん、この間に大きく変化した自然環境と人間の関係性、そして生物多様性科学や保全生物学が社会に受容されてゆく様にも著者の眼差しは注がれる。

エッセイとともに圧巻なのは130点にも及ぶ両生類とその生息環境のカラー生態写真である。和子夫人による1枚を別にすれば、全て著者自身が日本国内と台湾の生息地（ごく一部は飼育下）で撮影したものだ。その一つひとつがどのように撮影されたものか、その背景や経緯、撮影にいたる著者の熱意を知ること、両生類への理解が深まる。著者は日本自然科学写真協会の会員であり、アマチュアながらその技量は確かである。

著者は本書を「両生類好きの大人の読む本」としてしている。たしかに子供向けの図鑑や読み物ではない。しかし、カエルに限らず生きもの好きなら誰もが関心をもつに違いない逸話や話題が豊かに盛り込まれている。全てに原典が引用されているのも嬉しい。以下、多数の興味深いトピックの中からほんのいくつかを紹介しよう。

樹上で一生を終えるカエル

モリアオガエルやシュレーゲルアオガエルは樹上で生活するカエルだが、幼生は沼や池で成長する。ところが、同じ樹上性のアオガエル類でも、八重山諸島と台湾の森林に生息するアイフィンガーガエルは、樹上のたまり水（樹洞や着生植物の葉の付け根、竹の切り株などに溜まった水）の近くに産卵し、幼生はたまり水に落ちて成長するので、地上に降りることがない！たまり水に十分な餌があるものと心配になるが、驚くべきことに母ガエルが無精卵をたまり水に産み落とし、幼生はそれを食べて育つ。しかも、母ガエルは産卵場所をしっかりと覚えていて、他人の子に無精卵を食べさせることはないというから驚きである。

日本にもネオテニー（幼形成熟）サンショウウオ

日本産のサンショウウオには、アホロートル（ウーパールーパーとも呼ばれる）のようなネオテニー（幼形成熟）現象は見られないと思っていた。だがそれは誤りで、1920年代に北海道のクッタラ湖でエゾサンショウウオのネオテニー個体群が発見されている。ところが残念なことに、クッタラ湖には養殖用にヒメマスが移入されて、おそらくはその捕食圧によってネオテニー個体群は絶滅してしまった。だが、つい最近2020年代になって、北海道の別の湖で同種のネオテニー個体が再発見されたという。もちろん採集して飼育するのは厳禁である。

龍のモデルはワニ？

東洋の龍のモデルは恐竜の化石か現生の大蛇だろうと思っていた。著者の旧友の青木良輔氏はマチカネワニ（大阪で発見された数十万年前の化石種）こそ、龍のモデルだという説を唱えたが、ずっと無視されていた。ところが最近になって中国の青銅器時代の遺跡からマチカネワニに近縁なワニの骨が出土して、ワニ説がにわかに注目されているという。龍の大きく上下に開く口は、たしかにワニの大あごにそっくりである。

カエルの世界の国盗り物語

トノサマガエルにはダルマガエルという足の短い近縁種がいる。ダルマガエルは亜種や地域集団が複雑に分化していて難しそうだと思っていたが、最近の研究によってそれらの進化史が解明されつつあるという。ダルマガエルは日本固有種だが、トノサマガエルは大陸で進化し、朝鮮半島と日本列島が陸続きになった時代に日本にやって来たらしい。その後トノサマガエルは日本列島を北上する途上で各地のダルマガエルと激しく競合し、ダルマガエルに遺伝的な分化や特異な生殖行動の進化をもたらしたようだ。ヒキガエルやツチガエル、サンショウウオ類の多様性についても新発見が相次いでいる。

東洋のガラパゴスを外来種の脅威から守る

小笠原諸島は過去に大陸と地続きになったことがなく、そこにはガラパゴス諸島と同様、固有種が多くを占める貴重な生態系が発達している。しかし、その脆弱なシステムは人為的に持ち込まれた多くの外来生物の脅威にさらされている。著者は小笠原諸島における侵略的外来種問題の研究を一貫して主導し、世界自然遺産登録にも大きく貢献した。だが皮肉なことに、そこではオオヒキガエルやウシガエル、グリーンアノールといった外来の爬虫両生類とも激しく戦うことになる。

(Kaoru MAETO 兵庫県宝塚市)